

第3課 世の中のことをうらやんではならない

同じように、主も、福音を宣べ伝える者が、福音の働きから生活のささえを得るように定めておられます。（Iコリ9:14）



先週の2課に続き「世」という言葉が出てきます。世の中のことをうらやんではならないというのは、うらやむことがあるということであり、何かをうらやむことは、それが欲しいということであり、うらやむことが自分のものになると、それは私の自慢になります。これも創世記3章の「自己中心」から始まったのです。私にはあり、他人にはなく、私にはできるが、誰かはすることができないということに対する善悪の判断からきたものであり、結局は比較する対象の間の紛争となるのです。

これに対してパウロは旧約聖書のみことば（エレミヤ9:24）を引用して、「誇る者は主にあって誇れ。」（1コリ1:31、2コリ10:17）と言っています。また、「なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。」（1コリ2:2）、「私自身については、自分の弱さ以外には誇りません。」（2コリ12:5）



この世にイエス・キリスト以外には、私たちに眞の喜びとなる知らせもなく、真理もなく、永遠なものもありません。すでに世界の基が置かれる前からイエス・キリストにあって選ばれ、神様の子ども、天の民となった私たちに、肉を持って、時間と空間の限界のあるこの世を生きるようにしてくださったのは、イエス・キリストの恵みと父なる神様の愛を悟り、知り、それを伝える者、つまり神様の栄光だけを現して生きるためです（イザヤ43:7、エペソ1:6）。

この世は神様が脚本（シナリオ、どんなストーリーなのか）、監督（演出、どのように作るのか）されたドラマや映画のような所であり、主人公はただイエス・キリストだけです。その他の登場人物や、舞台背景はすべて主人公をさらに輝かせるために使われる小道具に過ぎません。ですから、この

世や世界にあるものはすべてイエス・キリストとその方を通して完成した神の国を説明するための模型であり、モデルハウスなのです。（Iコリ7:31 世の富を用いる者は用いすぎないようにしなさい。この世の有様は過ぎ去るからです。） 実物が来れば模型は去らなければなりません。（IIペテロ3:7 しかし、今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。）



私たちにはイエス様の十字架によって世に対しては死んだ者であり、神に対しては生きた者です。私たちのすべての自慢はイエスだけなのです。

ローマ6:11 このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。

ガラテヤ6:14 しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。

なんかをやるかやらないか、食べるか食べないかの基準は、福音を宣べ伝える事と（Iコリ9:14）、神様の栄光でなければなりません。こういうわけで、毎瞬間地上のものではなく、天にあるもの（イエス・キリスト、神の国、聖霊の満し）を探し求めてください。

コロサイ3:1-3

1 こういうわけで、もしあながたが、キリストとともによみがえられたのなら、

うえにあるものをもとめなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。

2 あなたがたは、地上のものを思はず、天にあるものを思いなさい。

3 あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、

神のうちに隠されてあるからです。